
バカとテストと召喚獣と.....。

ナタデココ<ヨーグルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣と……。

【Nコード】

N8554K

【作者名】

ナタデココくヨーグルト

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の二次創作です。

初心者などで誤字脱字などあり、目立つかもしれませんが、どうか温かい目で見守ってください。

プロローグ

【第一問】

問 以下の問に答えなさい。

『調理のために火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

高橋修平の答え

『問題点……なにを作るか決めていなかったこと。

合金の例……スターリングシルバー』

教師のコメント

確かに計画性も大事ですね。なので君もきちんと計画を立てて勉強してください。

なぜそのような合金の例を知っているのですか？不思議で仕方ありません。

ちなみにスターリングシルバーは食器などを制作する際の合金です。

「行ってきますッ！！」

玄関の扉を勢い良く閉め、駆け出す。

やべッ！やべッ！

起きたときが八時……、ああ！もう兎に角やばいッ！！

朝から何をそんな慌てているかって？

見てわからないか？

寝坊だよ、寝坊。

誰でも十回はしたことがある寝坊だよ。

……普段なら別に焦らないんだが今日は特別だからな。

んあ？

なにが特別だって？

いちいち面倒だな……。

今日から新学期だ、以上ッ！

わけわかんないって？

いいの！

俺だけわかればいいの！……やっぱだめだな。きちんと説明しとくか、今後のために。

そいや自己紹介が遅れたな。

俺は高橋修平。

字を読んでの通りの特に目立つ点のない普通の学生だよ。

俺が通ってる学校は文月学園っていうんだけど。

その生活指導のムキムキマンがよ、『お前は遅刻が多すぎる！新学期早々遅刻したら三階のクラスすべての掃除をしろらうからな！』って言ったから今日だけは遅刻できねえんだよ。

てか二年目なのになんで三階なんだろうな？二階で……やべッ！マジで遅刻しちまう！

「高橋、遅刻だぞ」

校門の前で息を整えていると、聞き慣れた低い声が聞こえた。

「あ、ども」

「ども、じゃない。何時だと思っている？」

そう言っ学校の時計を指差す。

「自分の目が腐っていなければ九時半ですね」

「そつだ。……約束覚えてるだらうな？」

顔に……体に似合わぬ不適な笑みを浮かべ言ってくる。

……やべーよ。

「覚えるって言ったら覚えるっていうか、覚えていたくないっていうか……」

ちらつと鉄人の表情を伺う。

ちなみに鉄人つてのはこのムキムキマン。

本名は西村。

鉄人つてのはあだ名で、趣味がトライアスロンとかなんか……。

「……」

あら、怒ってらっしゃる。

「まあいい」

「えっ？」

あれ？いいの？

俺が頭に疑問符を浮かべていると。

「それよりほら」

と言って懐から怪しげな封筒を俺に渡してきた。

「生暖かくて気持ち悪い懐ですね」

やべッ！つい本音がッ！

「そこは封筒ではないのか！」

ゴツ！

一発ゲンゴツが入りました……とほほ。

「にしても……めんどろっすね」

「なにがだ？」

眉をびくつと動かし聞いてくる。

「別に鉄人に言ってるわけじゃないっすよ、ただ掲示板とかでバント、て大きく張り出せばいいじゃないっすか？」

「またお前は鉄人と……そのようなことはついさっき聞かれたばかりだぞ？なんども説明するのは疲れる。そいつに聞け」

あらあら先生とは思えない言い方ですこと。

「そいつとは？」

「バカ（吉井）だ」

「バカ（明久）ですか」

あちゃー、アイツと同レベルってか……。

「それより早く教室に行け」

おっと、忘れてた。

さてさて、俺のクラスはどこかなあ？

手をわきわきさせて封筒の端を切りにかかる。
こつこつ時ってやけにドキドキするよな？
席替えとかのドキドキ感に似てるよな？

と、ドキドキを楽しんでいると。

「ちなみにお前はFクラスだ」

「俺のドキドキを返せー！ーッ！」

「ん？突然なにを言い出すんだ、お前は」

悪びれた様子もない鉄人。

くそ！

人の楽しみを！

このドキドキのせいで昨日寝れなくて遅刻したってのに！

「早く行け」

「へいへい」

俺は小走りで校舎に入る……ところで鉄人に呼び止められた。

なんだよ、まだなにかあんのかい。

「まだあんすか？」

より一層ダルそうな声で聞く。

すると……

「掃除道具はAクラスの物を使い」

「鬼ーーーーッ！」

底辺クラスの心境

【第二問】

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。

他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も気から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 『(2) 泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント
君は鬼ですか。

高橋修平の答え

- 『(1) 鉄人の肉離れ』
- 『(2) 泣きつ面に虻』

教師のコメント

西村先生に伝えておきます。

(2) に関しては珍しく惜しい解答でしたね。しかしなぜ『虻』などという漢字が書けるのが不思議です。

Fクラスに着いたのはいいものの……。

「……なんだこの豚小屋は？」

言葉の通り、Fクラスもとい今日から俺が一年間ともにする教室は、見てくれもなにもあったもんじゃないただの豚小屋だった。

にしても……なんだこの騒々しさは。

豚小……フクラスは『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』とか『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』などのバカ丸出しの声が飛び交っている。

なんて楽しそうなクラスなんだ。

俺の胸の奥からなにかアツイものが沸き上がってきたぜ！

……とまあ、そんなことを思っただけでもメリットはないのでちょっとちやと教室に入りますか。

俺は教室のドアをガラリと開け、教室の中に足を踏み入れる。

「遅れてすいませーん」

と言って入った瞬間、先ほどまでの賑やかな空気が一転し、静寂が訪れた。

おや、なんだいこの空気は？
俺は静かなのは苦手だぜ？

「高橋くんですか、丁度良かったです。自己紹介をしてください」

黒板の方から覇気のない声が俺に指示をする。

「え、あ、はいわかりました」

覇気のない声の主は寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを着た、貧相な教師みたいなオジサンだった。

あれは担任か？

担任だったらやけにつまらなそうな担任だな……。
そんなら鉄人の方が……。

「高橋くん？どうしたんですか、早く自己紹介をしてください」

「うえ？あ、はいすみません」

考え事してたら怒られちゃったぜ。

「高橋修平といます。……えー、多少顔を知っているような人はいるんで仲良くしてやってください。よろしくおねがいます」

と言って、空いている席へと腰を下ろす。

「……修平、また遅刻」

「んあ？」

椅子がないためあぐらをかいて卓袱台の上につき伏そうつとしたら、聞き慣れた声が後ろから聞こえた。

「おお、康太じゃねえか。お前もFクラスか」

「……うん」

こいつは去年仲良くなったヤツの一人で、土屋康太。
見た目の通り、小柄なんだが意外に引き締まった体をしているし、
運動神経もいい。あとエロい。
口数が相変わらず少ないが。

「ワシもおるぞ」

次は右の方からの声。

この喋り方はあいつだろうな。

「よっ、秀吉」

木下秀吉。

こいつは色んな意味で苦労をしている大変なヤツだ。
性別は男なのに、見た目が美少女だから『第三の性別秀吉』なんて
認識されてるしな。
もちろん俺も同じような認識だ。悪いか？

「ちなにみ、明久と雄二もおるぞ」

秀吉が指さす方に目を向ける。

「ほー、あいつらもいんのか……妥当か」

「妥当じゃの」

「……妥当」

俺の言葉に秀吉と康太は苦笑しながら同意した。

雄二というのは、この学校の問題児の一人で、本名は坂本雄二。ボクサー体型の筋肉質男子だ。

頭の方は小学校時代は神童と言われていたらしいが、それもどこまで本当か……と、疑ってしまうほどのバカ。このクラス中ではトップクラスだが。

明久は、名字は吉井。

坂本に続いてのこの学校の問題児。特に目立つ点のないただのバカ。

唯一の長所といえば、『水で生活できるようなバカ』ぐらいしか思い付かん。

バキィッ バラバラバラ……

バカどもの説明をしていると、壇上の方でなにやら不可解な音がした。

「今何の音だ？」

「福原先生が教卓を叩いたらゴミ屑と化した音、じゃな」

秀吉が説明してくれたがピンポイントすぎる例えだったため言葉がでない。

そこまでの教室なのかい……。

担任の福原先生が教室を出てっからしばらくし……。

「修平、ちょっといいか？」

雄二のことじゃないのか？

「らしいってなんだよ？」

「明久がなんかあるみたいなんだ」

と、明久を指差し言う。

指の方向にいる明久と目が合う。

明久は申しわけなさそうに両手をあわせた。

そんな気を使う必要ねえのにな……。

寝起きで走ったりしたからだるくて眠いが、ダチの頼みならしょうがねえな。

「わあつたよ」

俺は卓袱台にドンッ、と手を突き、立ち上がった。

バキッ ゴトン

卓袱台を代償に……。

「……災難だな、修平」

慰めてくれるな、雄二。
逆に悲しくなる。

「んで、話って？」

廊下に出ると、早速雄二が口にした。

当の本人の明久は辺りをきよろきよろと見回している。

「今はHRの時間だから人ならいねーぞ。……たぶん」

「そうみたいだね」

俺の言った言葉に頷くような仕草をした明久。

「この教室についてなんだけど……」

この教室って、Fクラスのことか？

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

先に雄二が察したのか、明久の待っていたらしき解答を言う。

「雄二もそうおもっよね？」

明久はそう言って、次に俺の方へと視線を移した。

わかってるっての……。

「俺も雄二と同じく」

肯定の姿勢をとる。

うそは言っていない。

「だよねだよね。ちなみに、Aクラスの設備は見た？」

「ああ。凄かったな。あんな教室は他に見たことがない」

「修平は？」

「んあ……俺は急いでいたからじっくりとは見ていない」

「そうなんだ。……あとで見に行ったら？驚くよ」

そんな凄かったなら後で見に行くかな。……うん、そうしよう。

そんなことを思っていると急に明久の顔つきが変わり、こんなことを言い出した。

「そこで僕からの提案」

ん？なんだ？

こういう時の明久は俺の期待を裏切らない。

「折角二年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

ビンゴ！

期待通り明久は試召戦争をしないかと話を持ちかけてきた。

試召戦争ならさすがにこの俺でも聞いたことがある。

簡単に説明すればクラスを賭けた戦争、とでも言っておくべきか。
Fクラスみたいな豚小屋同然のクラスに当たってしまったんだ、明
久が提案するのもないだろう。

が、

「戦争、だど？」

我がクラスの代表殿が警戒している様子。

「うん。しかもAクラス相手に」

「Aクラス相手に？」

明久の予想のしなかった言葉に、つい聞き返してしまった。

「……何が目的だ」

雄二の目が細くなり、警戒心が強まる。

それもそのはず。

わざわざAクラスを狙うことはない。

Aクラスには劣るが、最低限の設備なら別にDクラスでもCクラスでもいい。

ましてや、勉強に全く関心のない明久が今更勉強の設備を賭けた試召戦争をしようなんてのもおかしい話だ。

「いや、だってあまりにもひどい設備だから」

「嘘をつくな。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなことはありえないだろうが」

雄二も俺と同じことを思ったらしい。

「そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校に来るわけが

」

「お前がこの学校を選んだのは『試験校だからこその学費の安さ』が理由だろ？」

しまった、という顔をして口ごもる明久。

まあ、言い訳の途中で冷や汗ダラダラかいてたら誰でもわかるわな。

「……姫路の為、か」

ビクッ！

あ、動いた。

「ど、どうしてそれを!？」

あ、自爆した。

「本当にお前は単純だな。カマをかけるとすぐに引っかかる」

雄二の目から警戒の色が消えて、代わりに楽しげな笑みが浮かんだ。

あ、こいつなんか思いついたな。

「べ、別にそんな理由じゃ」

「はいはい。今更言い訳は必要ないからな」

「だから、本当に違っつてば！」

「明久は姫路にお熱、と」

「ちょっと！修平まで！」

明久が地団駄を踏んで弁解する。

「気にすんな。お前に言われるまでもなく、俺自身Aクラス相手に
試召戦争をやるうと思っつていたところだ」

なに？

「え？どうして？雄二だつて全然勉強なんてしないよね」

「それは俺も気になる。雄二、お前だつて設備になんて興味はない
はずだが……」

「ああ、設備なんてどうでもいい。……ただ」

「ただ？」

明久が雄二の言葉を聞き返す。

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明がしてみたくてな」

「????」

明久はいまいち理解してないらしい。頭に疑問符を何個ものっけている。

「それに、Aクラスに勝つ作戦も思いついたし　おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

雄二がそう言うと、廊下に担任福原が見えた。

福原先生が戻り自己紹介が再開され、後は代表の雄二だけとなった。

教壇に上がっている雄二は、無駄に自信に満ちた表情で俺たちの方を見た。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

人の前に立つことに対してなにも抵抗がないのかと思うほど、落ち着いた口調の雄二。

「さて、皆に一つ聞きたい」

そんな落ち着いた口調での雄二の言葉。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

「呼吸おき、」

「不満はないか？」

『大ありじゃあつ!!』

バカどもの魂の叫び。

その後は想像するまでもなく、このクラスに対する文句が飛び交う。

そんな状況の中、このクラスの代表は……

「これは代表としての提案なんだが……、FクラスはAクラスに『試召戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラスと言う名の爆弾に火をつけた。

先ほど雄二がこのクラスを奮い立たせていたが、クラスの連中が冷静になったのか次第に否定の意見が聞こえてくる。

確かに普通に考えてそうなるだろうな。
AクラスがFクラスに勝つなんて不可能に近い。

が、雄二は一切否定の意見を言わない。ましてや、『俺が勝たせてみせる』と宣言をした。

「なあ……どうおもっよ？」

秀吉を横目で見ながら言う。

「試召戦争のことか？」

「ああ」

「勝つというのは難しいかもしれんの」

「……だよな」

「修平、おぬしはどうおもってるのじゃ？」

「んあ？俺か？」

秀吉はコクコク頷いている。

どつっていわれてもな……。

「どつだろつな……」

「いや、訊いているのはワシなのじゃが」

「そうだったな。……勝つのは難しいかもしんないけどさ、勝てないってことはないんじゃないかな」

「ほう、なら修平は負けないというのじゃな？」

「いや、わからん」

「うむ？よくわからんのじゃが……」

秀吉が腕を組みながら、考え始める。

「俺が言いたいの、やらないとわからねえってことだつて」

そんな秀吉の頭をペチペチ叩きながら、笑って言った。

「人の頭を叩くでない。バカになるではないか」

「バカだろ」

「修平ほどではないぞい？」

「……わぁってますよ」

試召戦争 Dクラス戦

【第三問】

問 以下の問に答えなさい。

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「 * x

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

高橋修平の答え

「あれは

」

教師のコメント

これは、です。

「さあ来い！この負け犬が！」

「て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！」

「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たつぷりと指導してやるからな」

「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！」

「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやるう」

「お、鬼だ！高橋！木下！助けてくつ　イヤァァ　（バタンガチャ）」

……なんだこの状況は。
これが試召戦争なんか。

「……………のう、修平」

「……………なんだ秀吉」

「わしの思っていた試召戦争とはだいぶ違っんじゃが……」

「奇遇だな……。俺もだ」

目の前で戦友が戦死して、死神（鉄人）に地獄（補習室）に連れて行かれる様ななんて想像もしなかったな。
これも一応試験だっけことをすっかり忘れてたぜ……。

「……どうする秀吉、体育なら自信あんだが」

「……それなら召喚獣相手に肉弾戦をしてみてもどうかな？」

「遠慮しときます」

『ギヤアアアア』

あ、また一人戦死した。

くそッ！所詮DクラスといってもFクラスよりは学力は上か！

落ち着け俺。

雄二の話を思い出せ。
そうだアイツは

『土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性識者だ』

うんうん。康太は保健だけはいんだよな。
保健だけならAクラスレベルだから戦力だな。

『姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく

知っているはずだ』

実はあんま姫路のことは知らなかったんだが、ここまで雄二が言うのだから相当の実力の持ち主なのだろう。

あとは雄二自信か。
代表っていつてもFクラスだから……。昔神童と言われていたっ
ていう嘘くさい話を信じるしかねえのか。

まあ、んな感じで戦力は三人か。

……ん？

戦力が三人ってことはその戦力がない部隊はどうなんだ？

「……なあ、秀吉」

「なんじゃ？修平」

「康太や姫路が戦力って雄二は言ったよな？」

「うむ、言ったの。それがどうしたんじゃ？」

「いやさ……俺たちの部隊に戦力になるヤツはいるのかなあー、って思ってたよ」

そう言つと、秀吉はこの部隊にいるヤツらに目を向ける。

「……いないのう」

いやいや、そんな冷静に言われても！

「相変わらずの冷静なんだな」

「これでも結構あせっておるけどのう……」

苦笑しながら秀吉が言う。

それであせってるんならすげえと思います。

「でもじゃな、修平。」

秀吉の顔から笑みが消え、

「男なら一度任されたことは責任を持ったなければならんと思うん
じゃ……」

「めんどくさいが、それは同感だな」

「修平は男じやのう」

「よせやい。先に言ったのはお前だろ」

「それもそうじやの」

秀吉がそう言つと、俺たち前衛部隊の連中と戦っていたDクラスの
ヤツらが迫ってきた。

「結局やんのか……」

「しかたなかるう、戦じゃからの」

「まあ、お互い戦死だけは免れないとな」

「そごじゃの」

「そんじゃあ、
試獸召喚ッ！」

「明久、援護に来てくれたんじゃな！」

「秀吉、大丈夫？」

「うむ。戦死は免れておる。じゃが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい」

「そうなの？召喚獣の様子は？」

「もうかなりへろへろじゃな。これ以上の戦闘は無理じゃ」

「そっか。それなら早く戻ってテストを受け直してこないと」

「そうじゃな。全教科を受けている時間はなさそうじゃが、一、二教科でも受けてくるとしよっ」

「そういえば、修平は？」

「あやつなら戦死したぞい」

補習室での出来事

【第四問】

問 『OPEC』とは何の略称かを答えよ。

姫路瑞希の答え

『石油輸出国機構』

教師のコメント

問題ありませんね。この調子で勉強に励んでください。

土屋康太の答え

『おっぱいいツチな中学生』

教師のコメント

あとで職員室に来てください。

吉井明久の答え

『おっぱいいいね中学生』

教師のコメント

君もですか……。あとで土屋くんと一緒に職員室に来てください。

高橋修平の答え

『おっぱいEカップ中学生』

教師のコメント

君もあとで職員室に来てください。中学生のおっぱいの話を西村先生に聞いてもらいますので。

Dクラス戦が無事終わったらしく、鉄人が試召戦争で戦死したヤツらを解放し始めた。

「あんさあ、鉄人」

ゴツン！

「あがつ！？」

いきなり鉄人に殴られましたよ、頭を、しかもグーで。

「いきなりなにすんだああ！」

俺が鉄人に向かって叫ぶと、

「お前は目上の者に対して敬語も使えんのか」

何者でも射殺すような目で睨みつけ、言った。

あら、怒ってらっしゃる？

怒ってるなら面倒だな……。

よし、話を逸らすか。

「てか、試召戦争はどっちが勝ったんすか？」

「話を逸らす気か？」

「やべッ!？」

脳味噌筋肉のくせに気付いたか？

「まあいい」

気付いてなかったみたいだな。
良かった良かった。

「Fクラスが勝つたらしいな。なんでも圧勝だったらしいぞ?」

と、暑苦しい顔で笑いながら言った。

圧勝って……Fクラスも結構戦死してたけどな。

それにしてもなんで鉄人は笑っているんだ？

普通問題見ばかりのFクラスが勝ったら、教師としてはあまりうれしくない出来事にも思えるが……。

「ヤケにうれしそうっすね」

とりあえず質問してみた。

「ん？なんだ、うれしそうに見えたか？」

「ええまあ」

「そうだな。うれしくないことではないな」

「珍しく歯切れの悪い解答っすね」

「なんだ高橋、質問ばかりして。そんなに先生のことを知りたいのか？」

「暑苦しさ満開の筋肉野郎のことなんてこれっぽっちも」

ゴッソ！

「あぐつ!？」

またもや頭に衝撃が走る。

「口の効き方には気をつけろよ？」

「くっ……この体罰教師！」

「体罰？愛の鞭の間違えだろう」

何を言ってるんだこのキン肉マンは……。
吐き気が止まらないぞ。

「で、高橋。なにをそんな聞きたいんだ？」

鉄人がもう一度話を振ってくる。

「いや、Fクラスみたいな問題児の集まりが勝っちゃまって、先生たちは好ましくないんじゃないかなあ、と思ったださ」

そういうと、鉄人は一瞬呆けたが、すぐさま返答した。

「別に俺はなんとも思っていないさ」

「なんでっすか？」

「特に理由はないな」

「そすか。んじゃ、俺はこれで」

「高橋、ちょっと待て」

「なんすか？」

「俺からひとつ、いいか？」

補習室を出ようとした俺を呼び止め、今度は鉄人が質問してきた。

「なぜそんなことを思った？」

なぜって……。

「教師ならそう思うだろうと、思っただけっすよ」

「……随分と教師を蔑んだ言い草だな」

「自覚してますよ」

「嫌いか？」

「ストレートっすね」

「前から聞こうと思ってたんだ、答える」

「好きか嫌いかと聞かれれば、嫌いっすね。あつ、でも先生は割と好きっすよ？」

「ほう、お前が俺を？」

珍しく驚いたような顔の鉄人。
勘違いすんなよ？そっち系じゃねーからな。

「割と、ですけどね」

「それは意外だったな」

「明久や雄二あたりも同じように気持ちっすよ。きつと」

「それはますます意外だな」

そういう、鉄人の顔の方が意外なのは、言うまでもない。

「んじゃ、俺帰りますんで」

と、言つて今度こそ補習室出ようとするど、またしても鉄人に呼び止められた。

しつけえなあ……。

「なんすか」

「掃除さぼるなよ」

前言撤回。

やっぱり俺、こいつ嫌い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8554k/>

バカとテストと召喚獣と.....。

2010年10月15日17時43分発行